

$t\text{ṣ}^h / t\text{ṣ} / d\text{ṣ}$
——チベット系諸言語における歯－後部歯茎破擦音——*

鈴木 博之

京都大学

$t\text{ṣ}^h / t\text{ṣ} / d\text{ṣ}$: Denti-postalveolar affricates
in Tibetic languages

SUZUKI Hiroyuki

Kyoto University

Summary

This article primarily aims to describe newly recognised sounds: denti-postalveolar affricates [$t\text{ṣ}^h / t\text{ṣ} / d\text{ṣ}$]. It first introduces a methodology for the phonetic description for undocumented Tibeto-Burman (or Asian) languages beyond the regulation of International Phonetic Alphabet, by reviewing the definition and the use of several phonetic symbols such as ɳ and l . Then, it defines the articulatory manner of denti-postalveolar affricates and their symbols through a contrast with postalveolar affricates [$t\text{ʃ} / d\text{ʒ}$]. Next, it discusses the target sounds attested in Jintang Tibetan, a Tibetic language belonging to Rongbrag Khams spoken in the east of Darmdo Municipality, Kandze Prefecture, Sichuan Province. The article describes cases in the Changxu dialect of Jintang Tibetan and then compares related sounds of several dialects in Rongbrag Tibetan as well as Literary Tibetan. It concludes that the phonemes $/t\text{ṣ}^h, t\text{ṣ}, d\text{ṣ}/$ correspond to Literary Tibetan $c / ch / j$, for which various sound correspondences such as prepalatal affricates and retroflex affricates are attested in Rongbrag Tibetan, and then proposes a hypothetical sound change process: prepalatal affricates > denti-postalveolar affricates > retroflex affricates.

Key words: Tibetic, phonetic symbol, denti-postalveolar, dialectology, comparison

キーワード：チベット系諸言語 音標文字 歯－後部歯茎 方言学 比較

* 筆者による現地調査については、日本学術振興会科学研究費補助金若手研究（A）「チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究」（研究代表者：鈴木博之，課題番号 17H04774），日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「高精細度広域地図による中国および隣接する多言語地域の地理言語学的研究」（研究代表者：遠藤光暁，課題番号 18H00670），および国家社科基金项目《中国语言资源保护工程》子课题《民族语言调查・四川丹巴藏语二十四村话》（课题负责人：刘洁；项目编号 YB1912A008）の援助を受けている。

1. はじめに

本稿は、「歯－後部歯茎破擦音」という音の調音動作と表記を定義し、その音がチベット言語学においていかに位置づけられるかを検討する。具体的な記述に先立ち、現行の国際音標文字（International Phonetic Alphabet；以下 IPA）に含まれない音表記の必要性を、チベット・ビルマ系諸言語で展開された諸事例からまとめる¹。続いて、具体的な記述を行う。そのうち、具体的事例の記述と分析は、歯－後部歯茎破擦音をもつカムチベット語 Rongbrag 方言群金湯方言²（四川省康定市大渡河流域）を対象とする。加えて、この音が同方言群の中でいかなる音対応を見せるかを検討し、同方言群内における音変化史を考察する。

1.1 チベット・ビルマ諸語の音表記における諸問題

チベット・ビルマ諸語をはじめ、アジアの未記述言語の記述研究に取り組むにあたり、IPA を使用するだけでは音標文字が足りないといった問題に遭遇する。中国では、中国式の音標文字体系がある（《方言調査字表（修订本）》1981: 81 参照）一方、それを国際音標と呼ぶなど、IPA との間に矛盾がある。しかしながら、中国式にはそれ自体の価値があり、アジアの言語について有用な音標文字が定義されている。中でも、朱晓农（2010）は用語と音声記号を厳密に定義し、中国式で有用な記号を使うことを支持している（鈴木 2012b）。

チベット系諸言語（Tibetic；Tournadre 2014, Tournadre & Suzuki 2023 参照）において見ると、各変種を研究者ごとに独自の音標文字体系に基づいて記述する状況にある。これは、決して望ましい状況にあるとは言えない。チベット系諸言語は互いに系統的に近い関係にあり、チベット文語形式との対照を通じて、通時的な音変化を議論することが通例になるなど、比較研究を行うための素地がある。複数の言語を比較する場合、異なる基準でまとめられた表記の形式を比較するのは、まず基準の段階で表記の調整が必要となる。それゆえ、同一の基準で音表記を行うことは、記号体系の調整が不要になるため、有意義となることは言うまでもない。しかしながら、音標文字体系の統一は、実際問題困難である。たとえば、王双成（2012: 361）の試みた音韻の方言間の対照では、*ɲ* と *j* の異なりについて、各研究者の依拠する音標文字体系が異なるために表記法が異なるという事態に対して、正確に指摘していないといった事例が実際に起こっている（鈴木 2013b）。また、非言語学的な都合が音標文字の簡略化につながった例もある（张济川 2009: 278–281）。詳細は 1.2 を参照。

以上のような事態が起こらないように、Tournadre & Suzuki（2023）は、著者自身の 500 地点以上にのぼるチベット系諸言語の調査経験に基づいて、チベット系諸言語に統一した音標文字体系、すなわち *pandialectal phonetic description* とい

¹ チベット・ビルマ系言語とは関係なく、IPA 自体を拡張しようという考えもあり、たとえば extIPA という音標文字群が定義され、かつ拡張が続いている。Ball et al.（2018）を参照。

² 本稿では、原則として方言地点名を漢語表記とする。必要に応じて、ローマ字表記を添える。

う理念を掲げ、かつ必要であれば拡張可能とする非限定的な音標文字の集合を提示した。これはチベット系諸言語に特化したものではあるが、本節で提示した、IPA を基礎として朱晓农（2010）の拡張音標文字が取り入れられており、含まれない音標文字も必要に応じて追加可能である。これを用いて議論の対象言語を記述すれば、比較・対照研究で表記に起因する問題は最小化できることになる³。

1.2 具体例を通して見る pandialectal phonetic description

共通の基準に基づく音表記がどのように機能するのか、具体例を交えて先行研究の記述をまとめてみたい。以下に鈴木（2018）で記述した子音体系の複雑なカムチベット語翁上方言（雲南省迪慶藏族自治州香格里拉市格咱郷翁上村）を例として見ていく。表 1 は、pandialectal phonetic description を適用して記述した、翁上方言の子音体系（語頭に現れうる音素の一覧）である。

表 1 翁方言の子音体系

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋		軟口蓋	声門
					前	後		
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h	tʰ	tʰ	c ^h	k ^h	
	無声無気	p	t	t̚	t̚	c	k	ʔ
	有声	b	d	d̚	d̚	ɟ	g	
破擦音	無声有気		tʂʰ		tʂʰ			
	無声無気		tʂ		tʂ			
	有声		dz		dz			
摩擦音	無声有気		tʃ, s ^h	ʃ ^h	ç ^h	ç ^h	x ^h	
	無声無気		t̚, s	ʃ̚	ç̚	ç̚	x	h
	有声		ʒ, z	ʒ̚	ʒ̚	j̚	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ɲ̚	ɲ̚	ŋ̚	
	無声	m̚	ɲ̚		ɲ̚		ŋ̚	
流音	有声		l	r				
	無声		l̚	r̚				
半母音	有声	w				j̚		
	無声					j̚		

³ しかし一方で、音標文字の体系をそろえたとしても記述法自体が定量的ではないため、比較研究や類型論的研究としては、依然として厳密性に欠けるという批判もある。

表1の子音体系は、チベット系諸言語の中でも、最も複雑な部類に入る。このなかで、以下の3点の音標文字の使用および習慣について、他方言の記述における実践と対照しながら述べる。

- ・前部硬口蓋鼻音 [ɲ] と硬口蓋鼻音 [ɲ]
- ・無声歯茎側面摩擦音 [ɸ^h, ɸ] と無声歯茎側面流音 [ɸ]
- ・硬口蓋摩擦音 [ç] と軟口蓋摩擦音 [x]

IPA には ɲ という音標文字が認められないため、それに相当する音を ɲ で代用する習慣がある。しかし、この立場を尊重すれば、方言比較で問題が生じる（王双成 2012: 361 参照）。ɲ に対する詳細な音声学的問題は、Suzuki (2016) が詳しく論じている。

IPA では ɸ も ɸ^h も認められる音標文字ではあるが、張濟川 (2009: 278–281) にあるように、中国国内での研究では、実際は [ɸ] であるところを、印刷上の理由で ɸ と表記してきた。王双成 (2012: 56) などでは、「/ɸ/ の実際の音価は [ɸ]」と明言している（鈴木 2013b）。また、これとは逆に、星 (2020: xxix) は「/ɸ/ と表記するが、音声的には摩擦音 [ɸ] である」と述べる。ただし、筆者は星 (2020) の記述対象である方言の音声を若干ではあるが個別に記録している。この方言では /ɸ/ を認め、その厳密な音声学的特徴を [ɸ]–[ɸ^h] と記述したい。厳密な意味において観察対象が異なる可能性もあるが、いずれにせよ、各研究における音声記述に用いられる [ɸ] は、pandialectal phonetic description を用いた翁上方言の /ɸ/ [ɸ] とは一致しない⁴ 可能性があることを念頭に置く必要がある。これがチベット系諸言語の間で見られることが問題であると筆者は考える。

ç と x の問題は、実際のところ翁上方言内部では対立しているため、それ自体の記述に問題は認められない。しかし、これらの音標文字が異なる音を表すことがある（海老原 2019: 20 など）。そのような処理は、表1のような体系をもつ言語にとって不都合が大きい。チベット系諸言語では、Suzuki et al. (2019) が記述するように、音素表記に /ɸ/ も必要とされる（鈴木 2020）。このように、音標文字で区別できるところは区別しておく立場が、複数の方言を扱うときに重要である。

以上に見たように、音表記の一義性を担保することができれば、比較・対照研究における表記に起因する問題を最小化できるようになるであろう。それゆえ、既存の音標文字で対応できない例に出会ったとき、鈴木 (2013a, 2015) でも扱ったように、厳密な定義を伴う積極的な音標文字の作成による標記の一義性の担保が望ましいのである。

⁴ 翁上方言の分布地域に隣接する地域で話される巴拉方言では、/ɸ/ には [ɸ] 以外にもいくつかの条件変異音が含まれ、その中に無声歯端閉鎖音という音声が認められる。それについて、[ɸ] という音標文字で表すことにしている（Suzuki 2013）。

2. 歯-後部歯茎破擦音：定義と音声記述

2.1 定義

まず、歯-後部歯茎破擦音の調音動作を定義する。歯-後部歯茎破擦音は、次のような調音動作をとる。

- (1) 歯裏と後部歯茎を被動部位とする。
- (2) 破擦音の閉鎖音部分は、歯裏から後部歯茎にかけて舌尖が接触することで形成される。
- (3) 閉鎖の開放に後続する摩擦音は、舌端と歯裏、かつ舌尖と後部歯茎の間で狭めを形成する。
- (4) 以上の調音動作において、舌端は常に上切歯の裏にある。

以上の特徴を表す音標文字として、tʂ [tʂ] および dz [dz] の2種を認め、対象言語群の一般的な音韻体系を考慮すれば、無声有気音を含む tʂʰ / tʂ / dz の3種が必要とされる。

この音標文字の成立については、歯茎閉鎖音 [t / d] と歯裏摩擦音 [s / z] の組み合わせを基礎とする。後部歯茎摩擦音については、IPA に [ʃ / ʒ] があるが、後部歯茎破擦音 [tʂ / dz] との区別が必要になるうえ、そもそも歯-後部歯茎破擦音では舌の形状から、聴覚印象上常に歯音の特徴が卓立し、[ʃ / ʒ] が表しうる音声実現とは異なりが大きい。

また、筆者が調査したチベット・ビルマ諸語について、後部歯茎摩擦音 [ʃ / ʒ] を音素として認める事例において、それは常に平唇で実現される。英語・ドイツ語・フランス語・イタリア語 (Canepari 2006: 61–63) に見られるような円唇化や、ロシア語 (城田 1993: 13) に見られるような軟口蓋化を伴う事例は認められない。なお、アジアの諸言語における ʃ の位置づけについては、朱晓农 (2010: 181–184) の批判的検討がある。

2.2 金湯方言 (昌須方言) における歯-後部歯茎破擦音

金湯方言とは、四川省甘孜藏族自治州康定市金湯地区 (捧塔郷、金湯鎮、三合郷) で話されるカムチベット語方言の総称である。Li & Suzuki (2020) や鈴木 (2021) の記述がある。筆者は三合郷の昌須村、および邊壩村の方言を記述した。この中で、本稿では昌須方言を中心に記述する。

昌須方言の子音体系 (語頭に現れうる音素の一覧) は、表2のとおりである。

表2 昌須方言の子音体系

		両唇	歯茎	歯 -	そり舌	硬口蓋		軟口蓋	声門
				後部歯茎		前	後		
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h		t ^h		c ^h	k ^h	
	無声無気	p	t		t		c	k	ʔ
	有声	b	d		ɖ		ɟ	g	
破擦音	無声有気		ts ^h	ts ^h		tc ^h			
	無声無気		ts	ts̚		tɕ			
	有声		dz	dz̚		dʑ			
摩擦音	無声有気		s ^h	ʃ ^h				x ^h	
	無声無気		s	ʃ̚					h
	有声		z	ʒ̚					ɦ
鼻音	有声	m	n			ɲ̥		ŋ	
	無声	m̥	ɲ̥			ɲ̥		ŋ̥	
流音	有声		l		r				
	無声		l̥						
半母音	有声	w					j		

以上のように、昌須方言には歯-後部歯茎破擦音および歯-後部歯茎摩擦音系列が認められる。後者については、音表記の上では歯裏摩擦音ということになるが、実際の音声実現については、主たる音声実現が歯裏摩擦音で、副次的に現れる異音として歯-後部歯茎摩擦音 [ʃ^h / ʃ̚ / ʒ̚], 後部歯茎摩擦音 [ɲ^h / ɲ̥ / ʒ], およびそり舌摩擦音 [ʃ^h / ʃ̚ / ʒ̚] が認められる。厳密な意味で、調音音声学的に同系列の破擦音と摩擦音は同列であるとは言えないが、調音動作の類似から、表2のように並べた。本節での焦点は歯-後部歯茎破擦音であるため、摩擦音については若干触れるにとどめる。

歯-後部歯茎破擦音は、たとえば以下のような例に認められる。それぞれの例には、対応するチベット文語（以下「蔵文」）形式を添える。蔵文のローマ字転写は、de Nebesky-Wojkowitz (1956) に従う。

昌須方言形式 ⁵	語義	蔵文
ˈtʂʰɔ	ペア	cha
ˈtʂʰa pɔ	雨	char pa
ˈn̥tʂʰã m̥bɔ	肝臓	mchin pa
ˈh̥tʂʰĩ	尿	gcin
ˈn̥dʒuʔ mu	尾	mjug ma
ˈh̥tʂʰə	舌	lce
ˈh̥tʂʰe ˈtɕi:	11	bcu gcig
ˈh̥tʂʰu ˈsã	13	bcu gsum
ˈh̥tʂʰɛ ˈŋɔ	15	bco lnga
ˈtʂʰi	犬	khyi

以上に示したように、歯-後部歯茎破擦音は、ほとんどの場合蔵文 c / ch / j に対応する。ただし、「犬」の例のように、例外的に khy に対応するものがある。一方で、「11」の第2音節のように、対応する蔵文に c がありながら歯-後部歯茎破擦音ではなく前部硬口蓋破擦音に対応するような事例もある。調査で得られた資料の中では、「11」のみがこの対応関係を示す。

歯-後部歯茎摩擦音が歯茎摩擦音や前部硬口蓋破擦音と対立することを示す例に、次の対があげられる。

昌須方言形式	語義	蔵文
ˈtʂʰɔ	ペア	cha
ˈtʂʰɔ	塩	tshwa
ˈtɕɔ	鶏	bya

また、表2から分かるように、昌須方言には歯-後部歯茎摩擦音も存在する。次のような例がある。

昌須方言形式	語義	蔵文
ˈʂʰɔ	肉	sha
ˈʂʰĩ	薪	shing
ˈn̥e ʂʰu	20	nyi shu
ˈzẽ	田	zhing
ˈn̥zɔ	4	bzhi

⁵ 昌須方言の母音組織と声調の表記は次の通りである。母音は調音位置として /i, e, ɛ, a, ɔ, o, u, ʊ, ʉ, ɐ, ə/ を認め、それぞれに長 / 短、非鼻母音 / 鼻母音の異なりがある。声調は語声調で、ˉ (高平), ˋ (下降), ˆ (上昇下降), ˊ (上昇) の4種類が弁別的である。

以上に示したように、歯－後部歯茎破擦音は藏文 sh / zh に対応する。摩擦音については、歯茎音と歯－後部歯茎摩擦音の2系列のみが認められ、次のような対立が認められる。

昌須方言形式	語義	藏文
ʃʰɔ	肉	sha
sʰɔ	土	sa

3. Rongbrag 方言群における歯－後部歯茎破擦音の位置

歯－後部歯茎破擦音が認められるチベット系言語は、現段階でカムチベット語 Rongbrag 方言群金湯下位方言群のみを挙げることができる。先に見た昌須方言の歯－後部歯茎破擦音に対応する形式が Rongbrag 方言の中でどのような対応関係を見せるのか、方言形式の比較を通して確かめていく⁶。

⁶ これまでに記述された Rongbrag 方言群と本稿で扱う金湯方言との共通点・類似点には、破擦音のほかにもいくつか認められる。たとえば、2.2 節で掲げた例の中に見られるような、藏文形式が末尾子音を伴わない a のとき、口語形式が /ɔ/ に対応するといった事例が挙げられる。Rongbrag 方言群の諸特徴については、鈴木博之（2015）を参照。

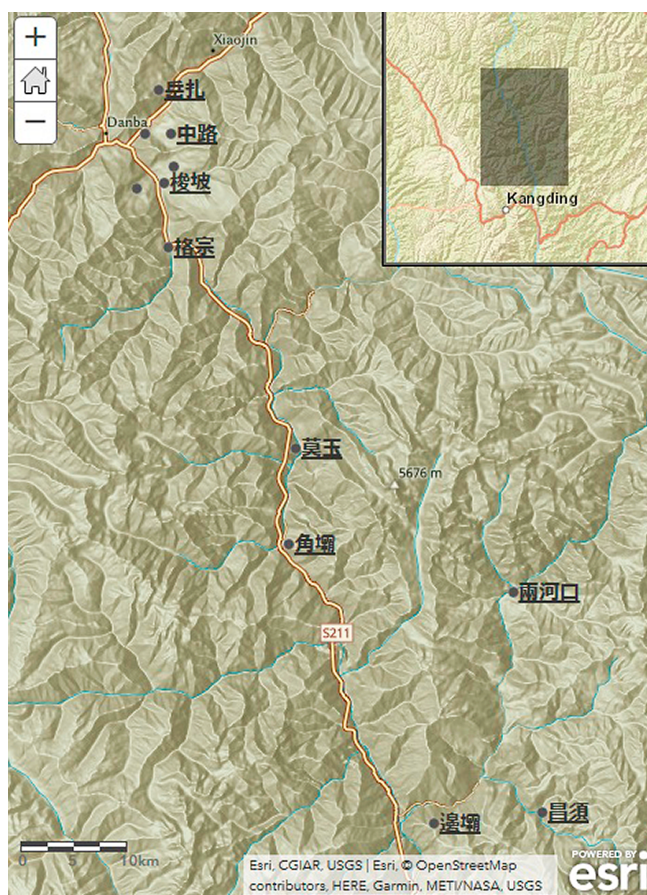


図1 Rongbrag 方言群の分布地域 (ArcGIS online を用いて作成)

Rongbrag 方言群の分布地域は図1に示すように、甘孜州の康定市と丹巴県の大渡河流域を中心とする地域である。筆者は、同方言群を丹巴県にのみ分布するものと考え、当地の名称である「二十四村話」という呼称を用いたこともある (Suzuki 2011b) が、最近の調査によって、さらに広い範囲で認められることが分かってきた (鈴木 2019)。

以上の地域で話される方言から、岳扎方言、中路 [呷仁依] (sProsnang) 方言 (鈴木 2007b)、中路 [基卡依] 方言、梭坡 [納依] 方言、梭坡 [莫洛] (Sogpho) 方言 (Suzuki 2011b)、蒲角頂 (Rongbrag) 方言 (鈴木 2008)、格宗 (dGudzong) 方言 (Suzuki 2011a)、莫玉方言、角壩方言、邊壩方言、昌須方言、雨河口方言⁷ のデー

⁷ チベット系諸言語の方言学的研究の蓄積により、方言名を郷鎮名から自然村名に変更したことに伴い、ここで掲げた方言名の命名規則に差異が認められる。郷鎮名を使用してきた方言については、必要に応じて自然村名を [] に入れて示す。

タを用いて、昌須方言に見られる歯-後部歯茎破擦音の音対応を見ていく。

2節において、昌須方言の歯-後部歯茎破擦音は蔵文 c / ch / j に対応することを確認した。これはすなわち、蔵文 c / ch / j 対応形式の方言比較になると言える。以下に、蔵文 c / ch 対応音として、「水 (chu)」と「11 (bcu gcig)」を例に、音形式を対照する。

方言\語義	水 (chu)	11 (bcu gcig)	各音節の c / ch 対応音
岳扎	$\bar{t}\bar{s}^h u$	$^h t\bar{c}u: \bar{z}i?$	$t\bar{s}^h / t\bar{c} / \bar{z}$
中路 [呷仁依]	$\bar{t}\bar{s}^h u$	$^h t\bar{s}u: \bar{z}i?$	$t\bar{s}^h / t\bar{s} / \bar{z}$
中路 [基卡依]	$\bar{t}\bar{s}^h u$	$^h t\bar{s}u: \bar{z}i?$	$t\bar{s}^h / t\bar{s} / \bar{z}$
梭坡 [納依]	$\bar{t}\bar{c}^h u$	$^h t\bar{c}u: \bar{z}i:$	$t\bar{c}^h / t\bar{c} / \bar{z}$
梭坡 [莫洛]	$\bar{t}\bar{c}^h \bar{\imath} [^h t\bar{c}^h u; ^h t\bar{j}^h \bar{\imath}]$	$^h t\bar{c}u: \bar{z}i?$	$t\bar{c}^h / t\bar{c} / \bar{z}$
蒲角頂	$\bar{t}\bar{c}^h u$	$^h t\bar{c}u w \bar{z}i?$	$t\bar{c}^h / t\bar{c} / \bar{z}$
格宗	$\bar{t}\bar{c}^h u$	$^h t\bar{c}u ^h t\bar{c}i?$	$t\bar{c}^h / t\bar{c} / t\bar{c}$
莫玉	$\bar{t}\bar{c}^h u$	$^h t\bar{c}u ^h t\bar{c}i?$	$t\bar{c}^h / t\bar{c} / t\bar{c}$
角壩	$\bar{t}\bar{c}^h u$	$^h t\bar{c}u ^h t\bar{c}i?$	$t\bar{c}^h / t\bar{c} / t\bar{c}$
邊壩	$\bar{t}\bar{s}^h u$	$^h t\bar{s}e ^h t\bar{c}i?$	$t\bar{s}^h / t\bar{s} / t\bar{c}$
昌須	$\bar{t}\bar{s}^h u$	$^h t\bar{s}e ^h t\bar{c}i:$	$t\bar{s}^h / t\bar{s} / t\bar{c}$
兩河口	$\bar{t}\bar{c}^h u [^h t\bar{c}^h u; ^h t\bar{s}^h u]$	$^h t\bar{c}o: ^h t\bar{c}i$	$t\bar{c}^h / t\bar{c} / t\bar{c}$

「水」と「11」の例を見ると、1方言内でも音対応が分かれるものがあることが分かる。この原因は主に後続母音の性質による場合が多く、たとえば、岳扎方言では母音が前舌の場合、前部硬口蓋音が現れる。梭坡 [莫洛] 方言では、前部硬口蓋音と $\bar{\imath}$ が連続したときに、子音の自由変異音に後部歯茎音が含まれる。中路方言は「11」の第2音節以外でそり舌音が現れ、梭坡 [納依]・蒲角頂・格宗・莫玉・角壩の各方言は前部硬口蓋音で一定している。後者については、分布地域が大渡河沿岸であることに注目できる。

以上のデータから、次の4種類に分類して、その地理的分布を見る。

- A：前部硬口蓋音のみに対応するもの
- B：歯-後部歯茎音による実現を含むもの
- C：後部歯茎音による実現を含むもの
- D：そり舌音による実現を含むもの

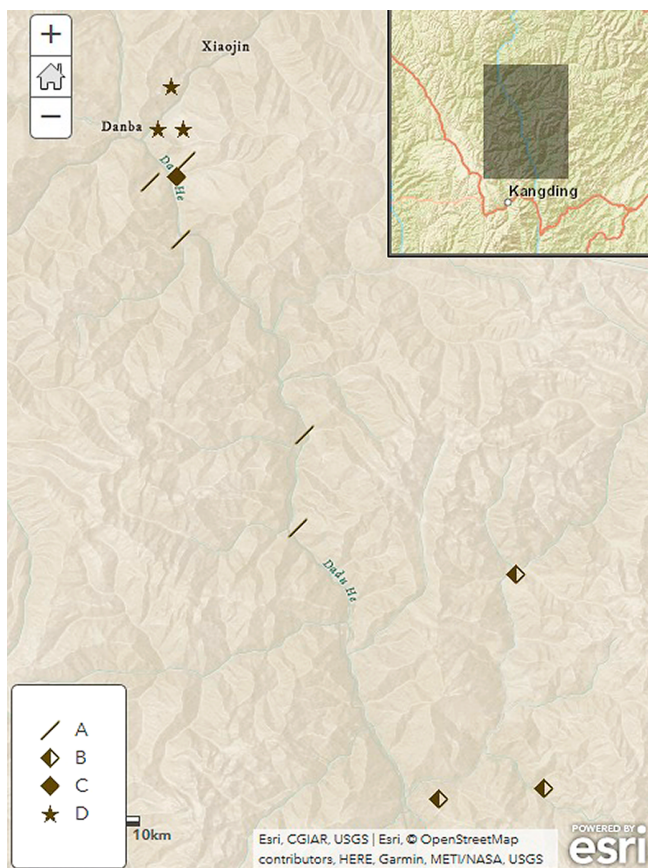


図2 Rongbrag 方言群における c / ch / j の音対応 (ArcGIS online を用いて作成)

当該音の調音音声学の特徴および藏文との音対応に基づいて図2に示される地理的分布を解釈すると、歯-後部歯茎破擦音は歴史言語学的には次のように位置づけることができると考えられる。すなわち、「前部硬口蓋破擦音 (A 類) > 歯-後部歯茎破擦音 (B, C 類) > そり舌破擦音 (D 類)」のように音変化したと考える。B 類と C 類は Li & Suzuki (2020) の議論にもあるように、自由変異音や条件変異音として現れる例もあり、B 類に分類される方言で音特徴が重なることを参考に、以上のように取り扱う。調音動作としては、舌端が常に下方にある前部硬口蓋破擦音⁸を音特徴の留保 (そもそも大多数のチベット系諸言語に認

⁸ 音声学理論上、前部硬口蓋破擦音の調音に可動部位である舌端の位置を規定する必要はない。しかし、音標文字の実際の運用については、前部硬口蓋音は舌端が常に下方 (下切歯の裏) にある一方、後部歯茎音は舌端が常に上方 (上切歯の裏) にあると見て問題ない (Suzuki 2016)。なお、張慧麗 (2010) のように、調音の定義には可動部位の指定も必要であるという主張もあり、本稿で検討したことを考えても、可動部位の指定は調音の定義と音声記述に役立つと言える。

められる音対応；江荻 2002, 鈴木博之 2016, Tournadre & Suzuki 2023 参照）と考え、そこから徐々に舌尖が上昇していくという過程を経て、歯－後部歯茎破擦音、そしてそり舌破擦音へと音の改新が起こったと考える。ただし、「歯－後部歯茎破擦音＞そり舌破擦音」という過程は、図 2 が示すように、地理的分布が離れているため、確認できたとはいえないが、地図北部の岳扎・中路・梭坡各郷あたりに北から D-C-A の順に分布している点を考えると、当該の音変化は 1 つのプロセスとして認めてもよい。昌須方言では、歯－後部歯茎摩擦音がそり舌摩擦音の変異を見せることがあり、その類推から考えると、破擦音について C-A は南部ではまだ発生していないといえる⁹。

もちろん、それぞれの音特徴を見せる方言の分布から、地理言語学的な理解に基づいてこのような音変化を認めるのは難しいともいえる。音体系はそれぞれの言語体系に独立して発生しうるものであるということが考えられるからである。しかしながら、音特徴についても、言語域と社会背景を参考にして、地理言語学的に解釈することも可能である（鈴木 2017, 2018）。この意味で注意が必要なのが、Rongbrag 方言群自体の歴史的発展について、詳細が分からない点である。Rongbrag 方言群に属するであろう言語が 18 世紀に記録されているという研究もある（鈴木 2007a）が、その言語域が現在の Rongbrag 方言群の分布地域とは若干のずれがあるなど、当該言語の歴史を十分に把握できる状態ではないといえる。しかし、現段階でも先述のような仮説を提出し、今後の議論につなげていくこともまた必要である。

以上に見たように、共時的な音声記述を詳細に行うことは、通時的变化にとっても示唆を与えるものとなる。方言学的な研究において、詳細な音声表記に取り組む必要があることは指摘されてきている（Moulton 1960 など）。チベット系諸言語については、鈴木（2018）や鈴木博之（2019）、Suzuki（2020）の実践があるが、加えて音標文字のあり方についても考えていく必要もある。

4. まとめ

本稿では、「歯－後部歯茎破擦音」という音の調音動作と表記を定義した。そののち、当該音が音素として認められるカムチベット語昌須方言の事例を記述し、

⁹筆者の調査したチベット系諸言語の中で、藏文 c / ch / j 対応形式がそり舌破擦音となる方言は、Rongbrag 方言群以外にも Sems-kyi-nyila 方言群（雲南省迪慶藏族自治州；鈴木 2018, Suzuki 2018）や Cone 方言群（甘肅省甘南藏族自治州；鈴木 2012a, 2015b）など、散発的に存在する。ただし、いずれの地域でも、後部歯茎破擦音や本稿で記述した歯－後部歯茎破擦音は認められていない。ただし、そり舌破擦音に対応する方言群は前部硬口蓋破擦音に対応する方言群に囲まれる形で分布することが多い。両者のタイプの間で話される方言群に後部歯茎破擦音や歯－後部歯茎破擦音をもつ方言群が存在する可能性は考えられる。今後の現地調査において留意する必要がある。なお、鈴木（2018）の報告する方言の中には、そり舌破擦音に対応するであろう藏文 c / ch / j 対応形式の中で、後続母音の性質によって前部硬口蓋破擦音と対応する事例があり、本稿で扱った D 類と似た対応関係を見せている。

当該音が藏文 c / ch / j と対応することを明らかにした。次に、同一方言群に属する周辺諸方言の音対応と対照することを通じて、歯-後部歯茎破擦音がチベット言語学においていかに位置づけられるかを検討した。その結果、仮説として、歯-後部歯茎破擦音は「前部硬口蓋破擦音 > 歯-後部歯茎破擦音 > そり舌破擦音」という音変化上の位置を占めることを述べた。

参考文献

〔日本語〕

海老原志穂

2019 『アムド・チベット語文法』 東京：ひつじ書房。

城田俊

1993 『現代ロシア語文法』 東京：東洋書店。

鈴木博之

2007a 丁種本《西番譯語》〈川六〉に記録される 18 世紀木坪チベット語の特徴。『内陸アジア言語の研究』XXII：157-180 頁。URI: <http://hdl.handle.net/11094/20648>

2007b チベット語中路〔sProsnang〕方言の /r/ を含む子音連続。『東京大学言語学論集』26：31-47 頁。

2008 ギャロン地域のカムチベット語・丹巴県蒲角頂〔Rongbrag〕方言の音声分析と語彙。『国立民族学博物館研究報告』33.1：39-80 頁。doi: <http://doi.org/10.15021/00003941>

2012a 甘肅省甘南州卓尼県のチベット語方言について：藏文対応形式から見た扎古録〔Bragkhoglung〕方言の方言特徴。『京都大学言語学研究』31：1-23 頁。
doi: <https://doi.org/10.14989/182195>

2012b 〔書評〕朱 晓衣 2010. 『京都大学言語学研究』31：211-219 頁。
doi: <https://doi.org/10.14989/182191>

2013a ɣ：チベット・ビルマ系諸言語における“唇歯母音”。『地球研言語記述論集』5：17-26 頁。
URI: <http://id.nii.ac.jp/1422/00000855/>

2013b 〔書評〕王 双成 2012. 『京都大学言語学研究』32：129-143 頁。
doi: <https://doi.org/10.14989/182198>

2015a ĥ と ĥ̃：鼻腔共鳴を伴う声門摩擦音に関する覚え書き。『地球研言語記述論集』7：141-149 頁。URI: <http://id.nii.ac.jp/1422/00000875/>

2015b 甘南州卓尼・迭部・舟曲 3 県のチベット系諸言語とその下位分類試論。『ニダバ』44：1-9 頁。URI: <http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045560>

2017 音韻現象の ABA 分布をめぐる解釈の方法とその実際—チベット文化圏南東端のカムチベット語を例に一。『言語記述論集』9：43-64 頁。URI: <http://id.nii.ac.jp/1422/00000911/>

2018 香格里拉市北部のカムチベット語諸方言の方言特徴とその形成。『アジア・アフリカ言語文化研究』95：5-63 頁。doi: <https://doi.org/10.15026/92458>

2019 カムチベット語梭坡〔Sogpho〕方言（丹巴県）における使役表現と構造。池田巧編『シナ=チベット系諸言語の文法現象 2：使役の諸相』15-28 頁。京都：京都大学人文科学研究所。URI: <http://hdl.handle.net/2433/245163>

2020 〔書評〕海老原志穂 2019. 『言語記述論集』12：71-80 頁。
URI: <http://id.nii.ac.jp/1422/00003697/>

2021 カムチベット語金湯方言における基数詞の形態論的特徴。『ニダバ』50：16-22 頁。

星泉

- 2020 アムド・チベット語メシユル方言の音韻特徴. 星泉・海老原志穂・南太加・別所裕介『チベット牧畜文化辞典（チベット語－日本語）』xxvii–xxxviii 頁. 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. doi: <https://doi.org/10.15026/94592>

[中国語]

江 荻

- 2002 《藏语语音史研究》北京：民族出版社.

鈴木 博之

- 2015 丹巴藏语在藏语康方言中的历史地位（向洵 译、意西微萨·阿错 校）. 鈴木博之《东方藏区诸语言研究》138–162 页. 成都：四川民族出版社. [原著为：Historical position of Danba Tibetan among Kham Tibetan dialects. Paper presented at the Workshop on Tibeto-Burman Languages in Sichuan, Academia Sinica, 2008]
- 2016 藏语方言学研究 with 语言地图：如何看待“康方言”. 《民族学刊》2016 年第 2 期：1–13+92–94 页. doi: <http://doi.org/10.3969/j.issn.1674-9391.2016.02.001>
- 2019 利用语音地图阐明音变的扩散和界限：以香格里拉藏语的“r 韵尾”语音演变为例. 鈴木博之、仓部庆太、远藤光晓编《东部亚洲地理语言学论文集》1–13 页. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- URI: https://publication.aa-ken.jp/sag_mono6_eastern_asian_2019.pdf

王 双成

- 2012 《藏语安多方言语音研究》上海：中西书局.

張 慧麗

- 2010 主動發音器官模型與國際音標的幾個問題. 《語言暨語言學》第 11 卷 4 期：653–678 页.

张 济川

- 2009 《藏语词族研究 --- 古代藏族如何丰富发展他们的词汇》北京：社会科学文献出版社.

中国社会科学院语言研究所

- 1981 《方言调查字表（修订本）》北京：商务印书馆.

朱 晓农

- 2010 《语音学》北京：商务印书馆.

[欧文]

Ball, Martin J., Sara J. Howard & Kirk Miller

- 2018 Revisions to the extIPA chart. *Journal of the International Phonetic Association* 48.2: 155–164. doi: <https://doi.org/10.1017/S0025100317000147>

Canepari, Luciano

- 2006 *Avviamento alla fonetica*. Torino: Giulio Einaudi editore.

Li, Chunmei (李春梅) & Hiroyuki Suzuki (鈴木博之)

- 2020 Affricate series of Jintang Tibetan (Darmdo, Sichuan). *Kyoto University Linguistic Research* 39, 1–22. doi: <https://doi.org/10.14989/261910>

Moulton, William G

- 1960 The short vowel systems of Northern Switzerland: A study in structural dialectology. *Word* 16: 155–182. doi: <https://doi.org/10.1080/00437956.1960.11659724>

de Nebesky-Wojkowitz, René

- 1956 *Oracles and demons of Tibet: The cult and iconography of the Tibetan protective deities*. 's-Gravenhage: Mouton.

Suzuki, Hiroyuki (鈴木博之)

- 2011a Phonetic analysis of dGudzhong Tibetan: The vernacular of Kham Tibetan spoken in the rGyalrong area. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 35.4: 617–653.

doi: <http://doi.org/10.15021/00003880>

- 2011b Dialectal particularities of Sogpho Tibetan——An introduction to the “Twenty-four villages’ pa-tois”——. Mark Turin and Bettina Zeisler (eds.) *Himalayan languages and linguistics: Studies in phonology, semantics, morphology and syntax*. Leiden: Brill. 55–73.

doi: <https://doi.org/10.1163/ej.9789004194489.i-322.25>

- 2013 Extraordinary sound development of *s and *z in mBalhag Tibetan (Shangri-La, Yunnan). *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 36.1: 101–110. doi: <http://doi.org/10.15144/LTBA-36.1.101>

- 2016 In defense of prepalatal non-fricative sounds and symbols: towards the Tibetan dialectology. *Researches in Asian Languages* 10: 99–125. URI: <http://id.nii.ac.jp/1085/00002195/>

- 2018 *100 linguistic maps of the Swadesh word list of Tibetic languages from Yunnan*. Fuchu: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

URI: https://publication.aa-ken.jp/sag_mono3_tibet_yunnan_2018.pdf

- 2020 Geolinguistic significance of the Phongpa dialect in the history of Yunnan Tibetan. *Proceedings of the Second Annual Meeting of the Geolinguistic Society of Japan*, 25–29.

doi: <http://doi.org/10.5281/zenodo.4515013>

Suzuki, Hiroyuki (鈴木博之), Tsering Samdrup (才让三周), Niangwujia (Nyingbo-Gyal) (酿吾加), Jixian-cairang (Chaksham Tsering) (吉先才让), and Sonam Wangmo (四郎翁姆)

- 2019 /f/ in Amdo Tibetan: Descriptive and historical approaches. *Journal of the Phonetics Society of Japan* 23: 76–82. doi: https://doi.org/10.24467/onseikenkyu.23.0_76

Tournadre, Nicolas

- 2014 The Tibetic languages and their classification. Thomas Owen-Smith & Nathan W. Hill (eds.) *Trans-Himalayan linguistics: Historical and descriptive linguistics of the Himalayan area*. Berlin: Walter de Gruyter. 105–129. doi: <https://doi.org/10.1515/9783110310832.105>

Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (鈴木博之)

- 2023 *The Tibetic languages: An introduction to the family of languages derived from Old Tibetan*. Villejuif: LACITO Publications. doi: <https://doi.org/10.5281/zenodo.10026628>